

これからの八尾の芸術文化を考える ワークショップ【第2弾】（要旨）

「誰もが芸術文化につながるまち・八尾」の実現に向けて、
みんなで考えませんか？

参加者募集！

これからの八尾の 芸術文化を考える ワークショップ 第2弾



日時 令和3年 **10月16日** (土)
14:00～17:00 (13:30開場)

会場 茶吉庵 (八尾市恩智中町3丁目1番地)

定員 20名 (参加費無料・申込順・八尾市在住/在勤/在学)
特典：ドリンク1杯と茶吉庵グッズ付き

主催・お問合せ先 八尾市 魅力創造部 文化・スポーツ振興課
電話 072-924-3909 FAX 072-924-3788
Eメール bunkasports@city.yao.osaka.jp

2022年8月、八尾市文化会館(プリズムホール)が新しい顔にリニューアルオープン。誰もが芸術文化につながり、もっと芸術文化の魅力にふれて楽しめる。そんなまちづくりに向けて、八尾市、助きます！6月に開催したワークショップに続いて、今回は「誰もが芸術文化につながるまち・八尾」を実現するためにどのようなことに取り組みはよいのか、一緒に考えてみませんか？

メール申込はQRコードから



八尾市 | やお
Yao City

ワークショップ・プログラム内容

趣意説明 「ここまでできました！プリズムホール大改修と条例づくり」

話題提供 「古民家から始まるほんまもの芸術文化」
萩原浩司氏/合同会社 茶屋吉兵衛 代表

ディスカッション 「芸術文化で実現する八尾のまち」
参加者の皆さんとワークショップ形式で話し合います。

登壇者紹介

話題提供者 萩原浩司氏
合同会社 茶屋吉兵衛 代表・萩原家第十九代当主
八尾市芸術文化振興審議会委員
平成29年 萩原家住宅の再生を執筆、平成30年 茶吉庵プロジェクト立ち上げ、クラウドファンディングを活用し、DIYを中心としたリノベーションを開始する(20年計画)、同年 合同会社 茶屋吉兵衛設立、平成31年 茶吉庵の第一次リノベーション完了 活用開始、国の登録有形文化財に指定される。

アドバイザー 藤野一夫氏
芸術文化観光専門職大学 副学長・神戸大学名誉教授
(八尾市芸術文化振興審議会会長)
平成19年度より21年度まで、文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「アートマネジメント教育による都市文化再生」事業推進責任者、ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー、専攻はドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学、アートマネジメント。

コーディネーター 中脇健児氏
場とコトLAB 代表・NPO法人ことふらぼ 理事
大阪芸術大学 芸術計画学科 准教授・天理医療大学 非常勤講師
“その場にいる人との場だからできるコトを伝える”をモットーに、アート、コミュニティプログラム、地産地消支援、教育、福祉などで活動する、ファシリテーションやワークショップを通し各事業主体のプロジェクトを支援する。共著に「タクマネージャー」[地域×クリエイティブ×仕事～旅路島路ローカルをデザインする～](ともに学芸出版)。

開催概要
日時 令和3年10月16日(土)14:00～17:00(13:30開場)
会場 茶吉庵(八尾市恩智中町3丁目1番地)
定員 20名(参加費無料・申込順・八尾市在住/在勤/在学)

会場アクセス
〒581-0883 大阪府八尾市恩智中町3丁目1番地
TEL. 072-943-7007
[電車] 近鉄大阪線 恩智(おんち) 駅 徒歩11分
※できるだけ公共交通機関をご利用ください。

申込方法
電話・メールのいずれでも受け付けます。
①電話の場合…八尾市 文化・スポーツ振興課 (072-924-3909)へお電話いただき、お名前・年齢・ご所属・電話番号をお伝えください。
②メールの場合…件名に「これからの八尾の芸術文化を考えるワークショップ参加申込」、本文にお名前・年齢・ご所属・電話番号をご記入の上、八尾市 文化・スポーツ振興課 (bunkasports@city.yao.osaka.jp)へメールを送信してください。

メール申込はQRコードから



主催・お問合せ先 八尾市 魅力創造部 文化・スポーツ振興課
電話 072-924-3909 FAX 072-924-3788
Eメール bunkasports@city.yao.osaka.jp

グループディスカッション

(テーマ：芸術文化とふれあう機会のあり方)



- 芸術文化に興味がないに対して : ほとんどの人はコレ、どうしよう。
- 機会のあり方に対して : 芸術文化の堅苦しさからの解放
- 入りやすい空気感と場に対して : 自分達が芸術を創ることで、ささやかでも文化を創る
- 用がなくても入っていける仕掛けに対して : 家や学校以外の居場所があるのは嬉しい／気楽に行ける所があると・・・by中学生
- 日頃から活動している（地域）に対して : ゴールを決めてやってね！人口増加とか。
- まちからアートを消してみるに対して : プリズムの議論から離れてみる

グループディスカッション

(テーマ：芸術文化とふれあう機会のあり方)

テーマ1：芸術文化につながる機会・深く味合う機会の提供、自由な芸術文化活動のための環境整備及び人材育成

発表者：井上委員

- 私のチームでは、誰にとっても芸術文化を自分のものと思ってもらえるようにするために必要な取り組み、すでに趣味やプロを目指すような携わっている人が、遣り甲斐を感じ、目指すところに達するために、どのような応援・支援があればいいのかという、2つの視点で検討したが、対象者が広いテーマであった。
- まず、芸術文化を身近に感じていない人に対してのアプローチについては、**芸術文化という言葉が人を排除しているのではないか、その言葉を使うべきではない、その言葉が入れない人をつくってしまう**という意見があった。では、どうすべきかについては、**オーケストラや演劇を押し付けるのではなく、もっと範囲の広いもの、服や日常のものはすべてアートであり、日頃から触れているものだ**という認識を持ってもらうべきではないかということで、一度街中からアートを消してみれば気付いてもらえるのではないかと意見も出た。
- **ホールなどの人の集まりやすい場所は、もっと入りやすい雰囲気、例えば用がなくては入れる漫画や絵本を並べた場所など**。今度、プリズムホールには中高生が勉強できるオープンスペースもできる。また、テーマ性を持たせ、聖徳太子がテーマになった漫画を並べることで、地域文化を知ってもらう機会になるのではとの話もあった。
とにかく、**入りにくい雰囲気を払拭する必要性と、芸術文化という言葉振りかざすべきではない**という話だった。
- 日頃から活動している人にとって必要なことについては、**発表の場や発信の場、そして対話の場**という話が出た。例えば、**朗読の方がお客様の感想を聞けるような場が、発信、発表と同様にある**ことで、活動が盛り上がり、才能が発見される場になるのではないか。**路上生活の方がアート活動を始め、八尾につくったトキワ荘に入り作品をつくるドキュメントを、YouTubeで発信する**という、面白いアイデアも出た。
今は誰も八尾のことを芸術文化のまちだとは思っていないが、意外性のある面白いアイデアで注目を集めることで、身近に感じるようになり、自分たちの目線だけでなく、外から来るアーティストの方に八尾の魅力を発見してもらいアートにしよう、自分たちの魅力が発見できるのかもしれない。
- 他にも多数の意見が出たが要約させてもらった。

取り組みの視点:

- 芸術文化(表現の工夫)に触れたいくなる機会の創出や環境整備
- 対話型鑑賞の実践など、芸術文化への理解を深める機会の創出

グループディスカッション

(テーマ：芸術文化による子どもたちの育み)



- 読み聞かせに対して : いつでもどこでも本に触れあえるまちになればいいな!
- 壁アート、かかしに対して : いいね、おもしろい
- どんな八尾になってる?に対して : 芸術文化は心でわかるもの。それも意識した子どもの健全育成も大切。その反対も大切。実はすでにやっていることも大切。

テーマ2：芸術文化による子どもたちの育み

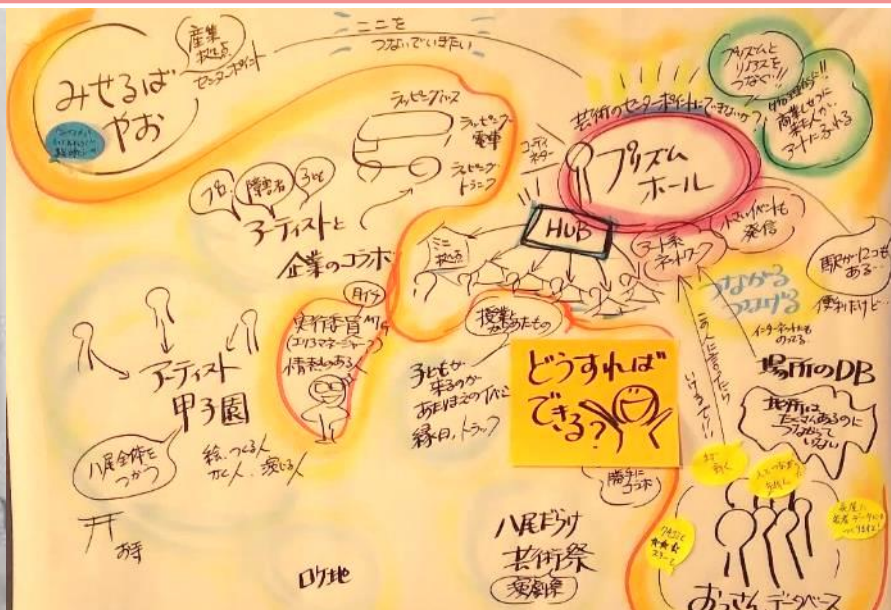
発表者：高崎委員

- 子どもに係わられているメンバーが多数おられ、非認知能力、IQなど数値化されない部分の評価や、社会教育を学ばれている方、環境問題や本の広場で読み聞かせをされている方など。
その中から出て意見としては、**非認知能力を伸ばすアートの実現する方法や、小さな満足感を与える方法、小さいことでも大切にしようという考え方など、誰もが学ぶことができる「場所」をどのようにするのが、ひとつのキーワードとなった。**
伝えるための場所が少ないため、**小さな点でもいいので、点をつないでいけばいいのではないか**という意見が出た。
- もうひとつは、**芸術文化のハードルを下げ、高尚なアートではなく、子どもたちの身近な活動を認めてはどうか**という意見もあった。
- また、**大人も子どもも安らげるようなスペース**があれば、そのような活動を広められるのではないかという意見もあった。
- キーワードとなるのは、自分も係わってきたことだが、**八尾にも廃校を利用した火も自由に使える場所、プレイパークをつくってはどうか**と感じた。
- 最終的には、**安心して弱音も言える場所だけでなく、アナログな八尾ならではの文化資源を子どもたちと一緒に活用していけばいいのではないか**ということになった。

取り組みの視点：

- 芸術文化による子ども(未就学児)の非認知能力の向上に向けた取り組みの実施
- 子どもの遊び(≡芸術文化)を促す環境づくり

グループディスカッション (テーマ：芸術文化による地域の活性化)



- プリズムホールに対して : 多種多様な人々が対話できる環境の創出
- 場所はたくさんあるのに つながっていないに対して : まず動く／人とのつながりに気付く
- おっさんデータベースに対して : ロコミと★★★スターも／長屋に若者データベースつくりますよ！
- ポテンシャルはあるに対して : おっさんデータベース、おばはんデータベース、スーパー子どもデータベース

グループディスカッション

(テーマ：芸術文化による地域の活性化)

テーマ3：芸術文化による地域の活性化

発表者：大内委員

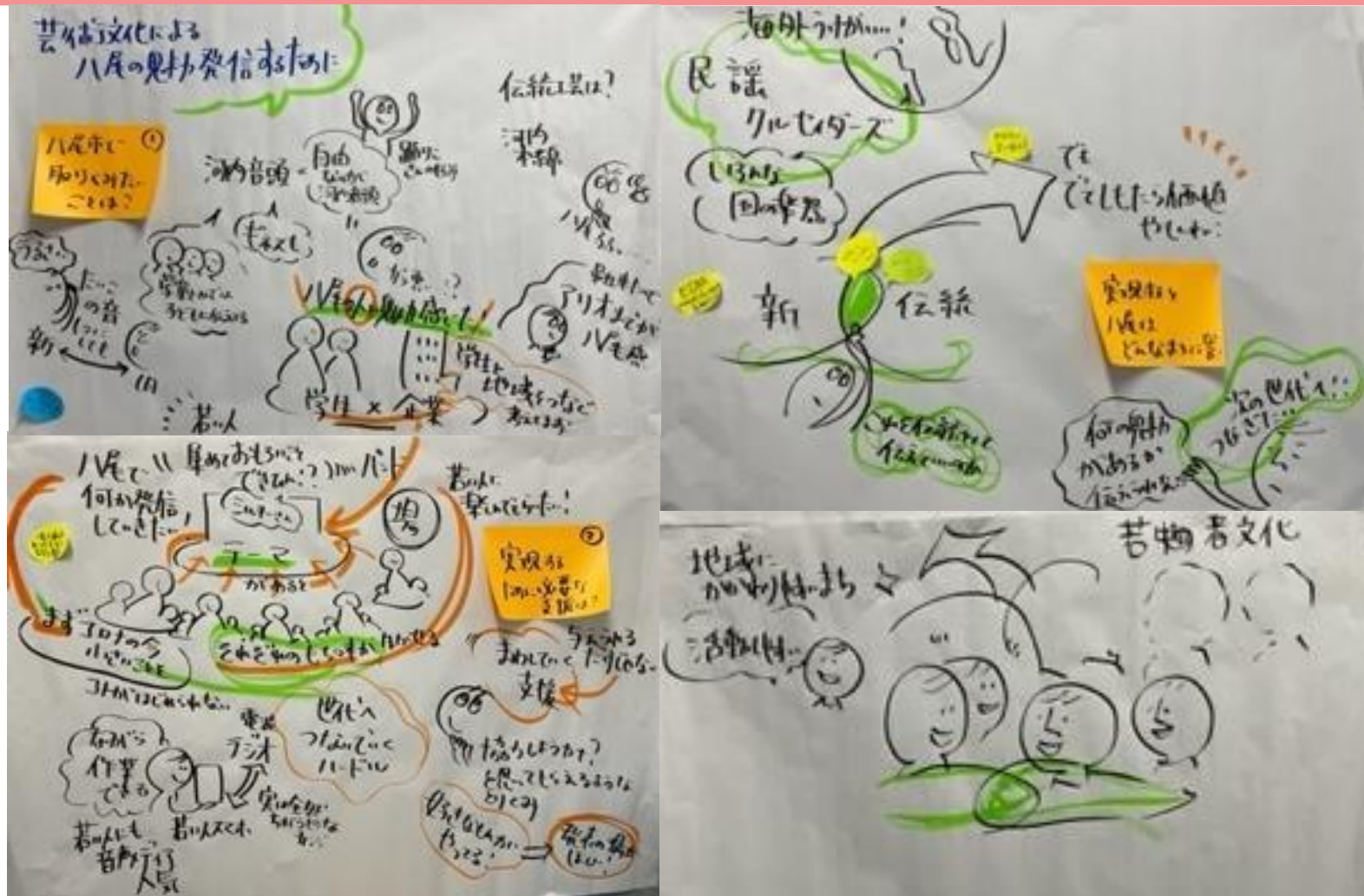
- 皆さん、すでにやり始めていることややりたいことがたくさん出ました。子どもたちが最初のキーワードになり、親子で里山ツアーをして、採取した自然のもので作品をつくることや、アートキャンプなども楽しめるのではないかとのことだった。また、ラッピングバスやラッピングビル、カフェでの音楽会などの意見が多数あった。
- では、やりたいことがあるのになぜできていないのかを考えた時、つながってないため、問い合わせ先や誰に言えばいいのかがわからない、そのハブはプリズムホールなのではないかとの意見が出た。「みせるばやお」は産業のセンターポイントなので、プリズムホールも芸術のセンターポイントにし、ハブとして小さな拠点に案内できればいいのではないか。
- アート系のネットワークをつくれないうか。面白い意見としては、おっさんデータベースをつくることで、八尾に非常に詳しいおじさん、おばさんのデータベースをプリズムホールで取りまとめてもらい、やりたいことの相談相手を紹介する仕組みがあれば、つながりやすくなるという意見だった。
- 子どもたちがどう輝けるかが芸術文化の肝になると思うが、今は八尾に住みたい人はそんなにいないかもしれないが、人々がつながっていけば、遊びにきて八尾の良さに気付いて住みたくなる、住みやすいまちNo.1になれるのではないか、そのポテンシャルがあるのではないかという話が出た。
テレビで「今週の八尾」として取り上げてもらい、八尾のいろんなことを紹介してもらえるといい。そのようになれば、イキイキした芸術文化が輝く楽しいまちになるのではないかという結論となった。

取り組みの視点：

- 芸術文化にかかる相談窓口の設置
- プロジェクトの創出から伴走支援まで取り組む多様なコーディネーターの育成(おっさんデータベース含む)

グループディスカッション

(テーマ：芸術文化による八尾の魅力発信)



- 八尾で何か発信していきたい！に対して
 - 新しいものに対して
 - 新しいものと伝統の融合に対して
 - でも出てしまたら勝ち(価値は間違い?) やもんね！に対して
- ：八尾の事が扱えない芸術が多い
：EDM KAWACHI LOND NIGHTとか
：常識を打ち破る文化/新しいものと伝統の●●
：自信を持って言い切れ！

テーマ4：芸術文化による八尾の魅力発信

発表者：鈴木委員

- メンバーは八尾河内音頭連盟の会長、八尾にある唯一のライブハウスのオーナー、伝統文化の活動をされている方、八尾で起業された大学生の二人と、すごいメンバーで話をしたが、年齢のギャップが激しい状態だった。
- まず出てきた話題は、**世代間の技術継承について。まちづくりもそうだが、次への技術継承がない。**本来は50代以下の方が1～2代を引き継ぎ、次に20代に引き継ぐべきだが、今は真ん中がなく、継承できないことが壁になっている。お金の問題はもちろんあるが、若い方に取組みたいことを聞くと、**河内音頭からバンドまで全分野をひっくるめた、手軽に参加できる発表の場が必要ではないか**との話になった。もっとフランクに発表できればいい。どこかに所属して発表するのではなく、気軽に参加できるような場があればいい。
- 民謡クルセイダーズと民謡をアレンジするバンドがあるが、地域から発信するもの考えた時、海外に発信するためにはどうするかという話になり、河内音頭もこのような発信を行っているが、それが河内音頭のPRになっているかということ、本当の河内音頭ではないという想いがある。伝統文化として受け継がれてきた河内音頭からみると、それは違うと感じられている。**新しいものと伝統文化の発信については、他の能や河内木綿も同じかもしれない。亜流にしてしまうと、伝統を引き継がれている方からみると違うと感じられている**ことを初めて知った。
- そのようなことも含めてどのようにPRしていくのかを検討したが、結局、八尾はどのようなまちになっていくのかという結論が出なかった。**海外へのPRは若い人に丸投げするのではなく、伝統文化を理解した上で発信することが重要だ**と感じた。それが世代間継承のハードルになるのではないかと。新しいものを発信するためには、伝統的なものと亜流を差別化して発信すること、そして気軽に発表できる場が必要だと感じた。
- 20代の二人は、八尾は住みやすい、人がいいと言ってくれている。それを今後、八尾に住む前の人に、八尾はいいところだと思ってもらえるような発信方法を検討しなければと思った。

取り組みの視点：

- (高齢者世代から若者世代への)芸術文化の技術継承の取り組み強化
- 芸術文化を活用した、若い世代や海外に向けた魅力の発信

- 大変活発で刺激的なWSだった。印象に残ったことだけ話したい。
- 芸術文化のあり方については、**芸術文化という概念自体が社会的排除を生んでいるのではないか**というパンチのある意見があった。審議会で芸術文化にするか文化芸術にするか、文化だけにするかの議論を行った。国は文化芸術という言葉を使っているが、八尾は芸術文化という言葉を使ってきたこともありこだわりのある委員もいた。これはなぜなのかを考え直す機会になった。もうひとつ、**プリズムホールありきから芸術文化を考えるべきではない**という意見もあった。**敷居の低いものにしていかなければダメ**なのだと思った。今は文化政策が、**芸術文化による社会包摂がメインストリームになっているにもかかわらず、芸術文化という言葉が持っている固定観念、エリートのためのハイカルチャーと感ぜられてしまう**ことを、考え直さなければならないと思った。
- 子どもたちの育みについては、非認知能力の話があったが、私も関心のある分野だ。私は芸術文化観光専門職大学に勤めているが、日本で初めて国公立で演劇やダンスを本格的に学べる大学ということで、全国各地から優秀な非認知能力が高い方が集まって来た。ところが、この半年で分析を進めると、**非認知能力が高い人は認知能力も高い**。これは良いことではある。つまり、非認知能力を高めれば、勉強もできるようになるとブームになっているが、これにも落とし穴がある。**意識の高い財産のある家に生まれると、文化的資本が継承されるが、そこから外れる人も多数おり、格差を再生産してしまう可能性がある。公共政策としての文化政策は、格差解消に取り組まなくてはならない。非認知能力にかかわる部分は公教育全般にまで広げなければ、特別な人だけのものになってしまう、怖いところだ。**
- いわゆる**新住民たちが都市型西洋型のアートを持ち込んできたわけだが、それに対して旧住民が伝統文化を支持して対立構造が出てきた**。それは、八尾の魅力発信の議論でもあったが、70代の方と20代の方の世代間ギャップがあり、世代間の技術継承ができていない。日本全体の問題だが、**団塊ジュニアの失われた30年が、40代、50代の世代でつながらない**。非正規雇用が多く、日本の弱点になっている。**伝統を継承するためには刷新は必要なのか、伝統を変えることは亜流なのかという問題もデリケートだが、文化政策が取り組むべきテーマだ**と思う。
- 最後に、皆さんとすり合わせたいと思うのは、文化的コモンズにどのようなイメージを描いているかだ。有形のもの／無形のものがある。一方で、**日本はみんながみんなとつながるのが当たり前だというのは、安心安全といういい面もあるが、うっとおしい村社会の同調圧力、相互監視社会にもつながる**。これからの世代がそういった社会を望むことはないが、**無縁社会を放置すると、誰もつながらない人が増えてきている**。無縁社会と同調圧力の強い村社会があるが、それとは別の場所として文化的コモンズを考える必要がある。つまり、**誰かが誰かとどこかでつながっている、出入りが自由な場所、ハードルが低く、風通しの良い溜まり場、そこから様々なアートや活性化が始まる場として、文化的コモンズをイメージできる**といい。